

戦後の街歌は力

広島学生音楽連盟に光

戦後まもなく、原爆で荒廃した広島を「音楽で復興させたい」と立ち上がった若者がいた。広島市内の学生有志が集まった広島学生音楽連盟。その活動に光を当てたコンサート「ヒロシマ・音の記憶」が25日、広島市で開かれる。当時のメンバーらの証言を交えながら、歌で当時をたどる。



旧制広島高校の講堂で、広島学生音楽連盟の混声合唱団が開いたコンサート＝「ヒロシマと音楽」委員会提供



当時を語る千葉佳子さん＝広島市中区

同連盟は、旧制広島高等学校(現・広島大)や広島女子専門学校(同・県立広島大)など少なくとも7校の学生が結成した。旧制高校が廃止される1950年(ころまで、毎月1回コンサートを開いたという。

「映画もテレビもない時

現代の若者と25日追憶の催し

代、自分たちが歌って広島を盛り上げようという思いがあった」

メンバーの一人だった広島市中区の元大学教授、千葉佳子さん(83)は振り返る。

千葉さんは45年8月6日、爆心地から約3・3kmの広島女子専門学校講堂で原爆に遭った。外に出たとき、「何にもなく全てが真っ白にみえた」という。戦後は食糧難に苦しんだが、それ以上に「歌に飢えていた」と千葉さん。

連盟では、戦前までは「御法度」だった男女の混声合唱団も結成され、約110人が参加した。「抑圧されたものが解放されたれ、若者のエネルギーが噴火した」と千葉さん。女子専門学校に他校の男子生徒たちが練習に来ると、他の女子生徒たちは興味津々で校舎の窓から様子を眺めていたという。当時著名な声楽家、四家文字をコンサートに招いたこともあった。

ただ、連盟の存在は長く忘れられた。広島にかかわる音楽の歴史をまとめている有志グループ「ヒロシマと音楽」

委員会の委員長で広島大特任助教の能登原由美さん(40)が調査の過程で千葉さんを知り、当時の話を聞いた。能登原さんは「戦後広島音楽活動の礎を築いた存在。多くの人に紹介したい」と考え、今回のコンサートが実現した。

当日は千葉さんら元メンバー3人のインタビュー映像を上映。連盟にゆかりのある広島女学院と、合唱の盛んな崇徳、安田女子の三つの高校が混声合唱で「混声合唱のためのカンタータ『土の歌』」を披露する。

広島女学院高音楽部長の柳谷萌さん(17)は「戦後の大変な時期に年の近い学生が音楽を築き上げてくれたことに感動した。今再び合同で合唱できるのはうれしい」と話す。

コンサートは午後2時から広島市東区東蟹屋町の区民文化センターで。チケット1500円(前売り1千円)。問い合わせはNPO法人「AN T Hiroshima」事務局(082・502・6304)へ。(柴田秀並)